

地域新聞にみる一九二五年から一九二九年(上ヶ原移転)
までの関西学院情報 — 『神戸又新日報』^{ゆうしん}を中心に — 〈下〉

津金澤聡廣

〈目次〉

はじめに

- 一、一九二五年三月の卒業式について
- 二、一九二六年の学院風景記事
- 三、一九二六年の学生クラブ活動
- 四、「上ヶ原移転」報道をめぐって
- 五、一九二七年後半の関西学院情報

(以上、前号掲載)

- 六、一九二七年の学院運動部の記録
 - 七、一九二八年の記事にみる学院教授訪問
 - 八、「地鎮祭」(新校地移転起工式)までの動向
 - 九、一九二八年の課外活動での活躍
 - 十、一九二八年のスポーツ活動記録
- あとがき

(以上、本号掲載)

〈はじめに〉

前号（『関西学院史紀要』第八号）に引き続き、主にとりあげた新聞は、戦前の神戸をはじめ兵庫県紙として最も有力で評価も高かった『神戸又新日報』である。この新聞は他紙と比べ神戸・原田の森にあった旧制関西学院についての情報が比較的多く見られ、とりわけ「学生又新」ページ創設（一九二七年十一月）以降は、そのページ担当の学院生記者・十河巖らの多方面に亘る執筆活動が活発に展開されたことが注目される。

以下、特に断りのない限り、前号同様『神戸又新日報』から引用、参照している。それ以外の新聞を引用する時はその新聞名を明記した。

六、一九二七年の学院運動部の記録

第十五回学生角力大会で準優勝

一九二七年にも運動部は各部共活発に活動している。たとえば、当時名門校として知られた相撲部は、五月に神戸又新日報主催第十五回学生角力大会（於・須磨寺遊園地）に中学部は県下中等学校の部に、高等部へ注1）は京阪神大学専門学校の部に出場参加している。この大会でも高等部は団体対抗優勝決定戦で大阪医大に三対二で惜しくも敗れたが、準優勝している。

中学部の成績は思わしくなかったが、その選手紹介記事（五月三日付）の見出しは「関西学院巧妙揃ひ」と次のように書かれている。「関西学院中学部は前回出場の経験を有するもの梅本

地域新聞にみる1925年から29年(上ヶ原移転)までの関西学院情報

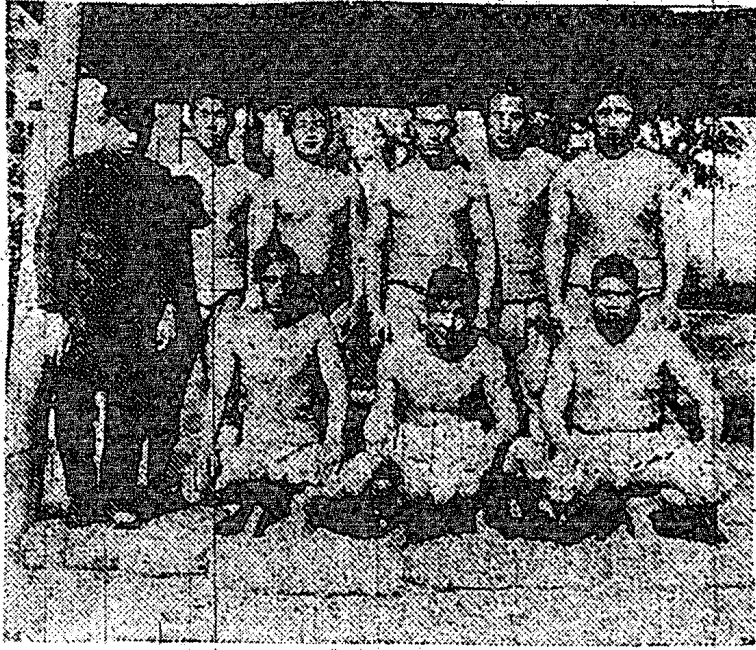
(一夫) 君と補欠に宮下(正巳) 君を有するのみで久林(文芳)、岡田(二郎)、鈴木(正治)、井上(政勝)、中山(正秀)、梅林(信夫)、光國(英敏)の諸選手何れも新進のみで其実力技倆の知るを得ざるが、多数の先輩を有し同一校内に高等部の剛勇を持つ同部としては常に其指導を受け範を求むるもの優越なる位置にあるだけ研究習熟の上に幾多の適好なる機会を有すると云ふ強味を持っている。

〔中略〕学友六百余名參觀団体として当日会場に出ずべく既に決して意気天を衝く。この記事から全校生徒挙げて応援にかけつけた熱気が伝わってくるようだ。

大学専門学校の部は、十二大学専門学校、八十四名の選手が参加出場した。その紹介記事では「関西学院、大捷確実」と次のように書かれている。(五月十八日付)



1927年5月第15回学生角力大会中学部選手たち
『神戸又新日報』1927年5月3日付



關西學院選手

『神戸又新日報』1927年5月18日付

「古い頃の竹野・堀部・武村・河合の全盛時代から一時劣へて又盛り代った大守・川口・平井・扇野・岩本等の黄金時代が目の辺にあって尚ほ今松浦（政次）・岡添（寅吉）・安田（保）の強剛斯界に聞えたものは刀根（利生）・唄野（政二）の諸君を加え、小原（立一）・野村（源三郎）の両君を補欠としての陣容愈よ闘志益々強きもの將に行く処何ものをも撃破打倒して止まざるの概あり、日々の土俵場裡猛習研錬既に十二分の確勝自信あり、優勝の栄冠は其頭上を飾る事

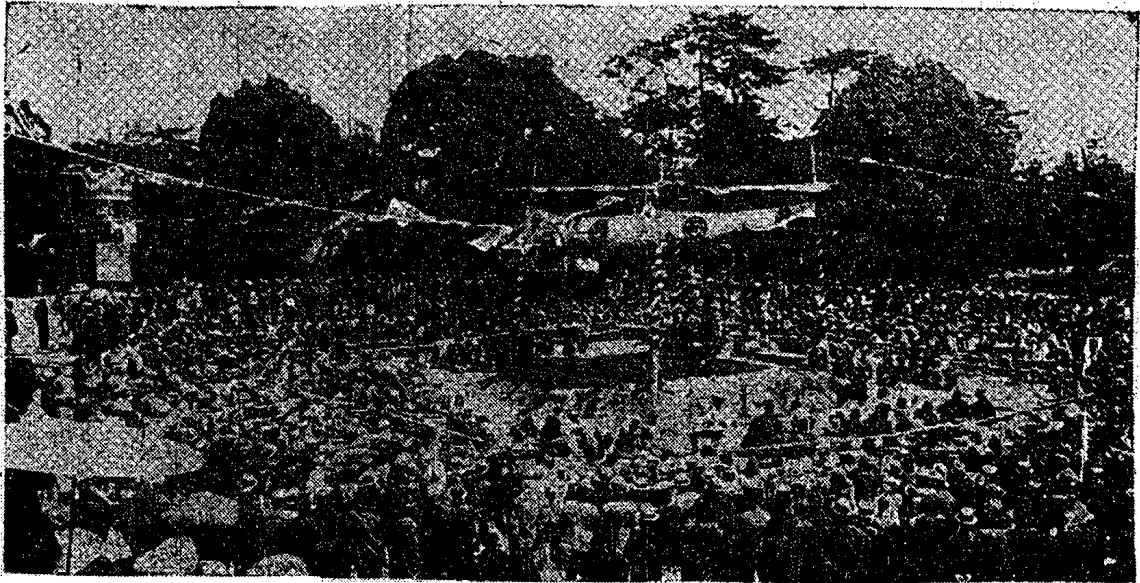
萬違算なきの策戦謀略あるを見る見よ、其陣容の優秀なるかを」

このうち、安田保選手は身長五・七五尺、体重二二貫の大型選手として活躍した。団体では優勝候補だったが、接戦の末準優勝となった。

中等学校全国大会を主催する各運動部

野球部関係でも、神戸高商とは好敵手であったと、六月十八日は関西学院球場において関西学院高等部現役選手対神戸高商クラブの試合があり、9A対6で学院勝利など紙面を飾っている。

また、六月二二日には早大野球団が大挙



会場を埋める夥しい観衆

〈当時の学生相撲の人気を象徴する会場写真〉
 第15回学生角力大会 於須磨寺遊園地
 『神戸又新日報』1927年5月22日付

して来襲、学院をはじめ神戸高商や宝塚協会と宝塚大運動場で対戦予定の記事もみえる(『阪神毎朝新聞』へ注2)六月二一日号)。

当時、野球、庭球に次ぐ人気のある学生スポーツはア式蹴球(サッカー)であったが、大正五、六年頃には全国の専門学校でサッカーを採用していたのは「僅かに東京、広島両高師と神戸高商、関西学院位なもの」(『阪神毎朝新聞』一月二一日号)だったという。学院はサッカーでも全国的にいち早く採り入れた伝統校であり、この年九月にも、学院高等部蹴球部主催、神戸又新日報後援の第三回全国中等学校ア式蹴球大会を開催している。(九月十六日付)

また、十一月二六日付で二段抜き紙面では「当地ウインター・スポーツの書き入れ物で幾多ファンの血を湧かす関西学院対早大の本年度第四回ア式蹴球戦は愈々来月一、二、三の三日間毎日午後三時から関学の大グラウンド

で挙行される」といった記事が出ている。学院対早大とのサッカー定期戦は当時の大人気の対戦だったようで、この定期試合第一回戦は観衆数千、二対零で関学の勝利（十二月一日付）、第二回戦も「早大の力闘空し」く一対零で関学再勝と報じられた（十二月三日付）。この対戦での関学選手は、FWが平山、檀野、青木、高田、澤田、HBが坪田、後藤、山口、FBは門脇、米澤、GKは斉藤の布陣だった。

十二月十九日付の紙面には、学院蹴球部、上海へ、二五日出発の予定という次のような記事が出ている。

「関東の雄である早大軍を見事粉砕した関西学院ア式蹴球部十六名は、池内教授附添のもとに愈よ二五日頃神戸出発、満潮の勢ひをもって上海の地に挑戦せんとす、その対試合チームの主なものは、一、交通大学、二、樂華、三、足球队、復旦大学、四、光華大学、五、聖ジョン、六、英陸海軍混成チーム等である」

サッカー部ばかりでなく、前号でもふれたように、学院高等学部柔道部も九月に、第三回全国中等学校柔道優勝大会を諏訪山武徳殿道場に於て主催（神戸又新日報後援）している。この大会には全国から三十五校が参加し結果は御影師範が優勝し、盛会だったようだ。それだけ柔道部も伝統があり権威もあった。（九月二三日付）

さらにこの年九月には、学院高等学部主催で第一回全国中等学校卓球優勝大会が学院商科新館控室に於て開催され、天王寺商業が優勝している。（九月二六日付）

スケート部と山岳部の活躍

十二月十九日の紙面には、スケート部の冬休み中の計画も報告されている。練習場はなんと六甲山頂に散在する池に氷が張ってからである。「六甲山頂の前が辻茶店を本陣として高野が池、三ヶ月池を専用のリンクとして毎日三十名余の部員が朝から夕まで、フィガー・プレーにスピードに一日を迂り続けるのである。それでもまだ迂り足りないものは、月の夜などには居残って青い月光を身に浴び乍ら天国の様に聖い境地にあつて影の様に軽く心に満つるまで迂り抜く、疲れて動けなくなると茶屋の炬燵にもぐり込む。今年は関西スケート聯盟に加入して一、二月に開かれるスケート競技会に出場する為に組織的な練習を實行するそうである。」月の光の中で迂り抜くという青春の情景が描写されていて面白い。

翌年一月九日付紙面では、「真冬の六甲は若人達にとって地上の樂園である」と、六甲の池のスケート風景を紹介している。それによると六甲への道は表の新自動車道が出来たので大変楽になったが、スケートをやるほどの者は勿論歩いて登る、という。登り切った所に幾つかの池があり、大きくて人気のあるのが高野池だ。高野は関西学院の学生が独占していた池だが、二八年からはスケート聯盟が成立したためにどこの池でも会員は自由に迂ることができるようになった。

「真のスケータリングのシーズンは正月の休暇明けの中頃から始まるので、関西学院スケートクラブも学校が初まると土曜、日曜にかけて三、四十名の会員が入り乱れて迂っている。新米は尻餅についてメリメリと云はせて肝を冷やしている。時に十数人も手をつないで前進し、中の一人が倒れると将棋倒しにぱたくと転がる。」学生たちにとってスケート遊びは新しい楽しみであったようだ。

「学生又新」の二七年十二月十九日号には、関学山岳部のスキー倶楽部便りのコーナーもあ

る。「待ちに待った冬が来た」「学院ではストーブを囲んで盛んにスキー練習の相談が熱をあげている」と当時からすでに学院生の間でスキー熱が盛んだっらしい。山岳部で組織されているスキー倶楽部は創設以来まだ四年の歴史だが、「本年は山岳部で新しく購入したスキーを貸し出して初めてスキーをやってみたいと云ふ学生に便宜を計っているから此の冬は益々隆盛を来たす事と思はれる」という。

この年スキー倶楽部の計画は左の通り。

「第一回スキー練習

場所 妙高山麓関温泉スキー場

期間 十二月二十四日より来年一月七日まで

出発 第一班二四日、第二班元日

費用 第一班四十円、第二班二十円

第二回スキー練習

場所 神鍋山

期間 一月十八日より同二二日まで

費用 十五円

なお、来春一月二二日神鍋山スキー場に於て全関西学生スキー競技大会を開催予定」

等々と報じられている。当時は山岳部員が初心者 of 学生たちにもスキー指導していた様子がわかり、山岳部員が同時にスキー部の活動を事実上担っていたという事実は、スキーの大衆化に果たした山岳部のエピソードとしても興味深い。

〔注1〕一九二二年に創設された高等学部(文科、商科)は、二二年に文学部、高等商業学部として独立し、神学部、文学部、高等商業学部を専門部とした。当時の新聞紙面等では、両学部を併せて「高等部」「高等学部」と表示することが多かったようだ。

以下、本文での「高等部」等の表記は新聞での表記をそのまま使用している。

〔注2〕『阪神毎朝新聞』は、一九二六(大正一五)年一月三日に創刊された阪急沿線PR紙である。

当初は本紙四頁建、毎月三回発行で、発行兼編輯印刷人は川村木治郎となっているが、実質的な編集・発行人は小林一三である。創刊号から一九二八(昭和三)年十二月十一日付の第一〇五号まで、(財)阪急学園池田文庫に現物が所蔵確認されている貴重な知られざる新聞である。

(津金澤聡廣「『阪神毎朝新聞』と小林一三」『館報池田文庫』第15号、一九九九年十月、参照)

七、一九二八年の記事にみる学院教授訪問

モダンボーイのフィッシャー教授

一九二八年に入ると「学生又新」の特集ページに、新たに「教授の家庭を訪ねて」と題するコーナーが見られ、当時の学院の教授や家族が写真入りで大きく紹介されている。

たとえば、まず、一月九日付では「モダンボーイのフィッシャー教授」「愚問珍答を交すの記」の見出しで学生が取材したらしい記事が掲載された。今となつては貴重なエピソードも多く、興味深い内容なので、引用が少々長くなるが、史料のひとつとして以下原文をそのまま採録しておきたい。



寫眞は向つて左がフイツシャ教授及び同夫人中が長男
國のヒマラヤ杉の前で撮られた平和な家庭生活振り

『神戸又新日報』1928年1月9日付

「若くて夫婦仲が良くて、モダンボーイの聞こえの高い関西学院のフイツシャー教授を―実は夫人を―訪れたが、まだ帰って居ないので暫くイジーチエアに埋まっていたらドアが開いた。そのミスターの顔を見るなり『一週間に何度元ぶらをやりますか』とあびせると先生ニッコリとして『今もクリスマススの買物に行っていたところですが、一週間に二度はやりませう。私は大丸ひいきです。週に一度は屹度大丸で食事を取ることにはきめています。時には親子丼も食べます。グリンの藪そばが東洋的な豊かだから大好きです』。コロンビア大学で新聞学のコースを取

ってきた人だけに物判りがいい。
ストーブに近よって紅茶を啜りながら静かに話を伺ふ。

先生は今年で漸く二十七で数年前に結婚されたが、米国から横濱に着いた時船の中で今の奥さんと知り合ひになって熱烈な信仰的恋愛が初まり、一旦米国の大学に引返したが東都大震災で奥さんが不意に米国にやってきたので『バイ、アクシデント』に早くも結婚されたのださうな。今では三つばかりの悪戯盛りの坊ちゃんが独り

ある。『死ぬまで日本に居やうと思ひます。毎日楽しく暮していますが、週に一度ばかりは同じ学校内に住んでいる他の外人教授と持ちよりの音楽会をやるのが一等の楽しみです』と、ちなみ因に奥さんはソプラノの歌手である。そしてミシシッピ大学出で文学就中なかんづくトルストイを研究されたと、此の冬休みはオーナードライブで宇和島、宮島あたりを見物なさるそうである。

あの青々と芝草の生え茂った廣い芝生は学院内で最も異国情調の濃厚なところである。一昔の前宵月の浮び出たある夕のこと学生が居るにも拘らず或外人が接吻をやってベーツ院長に注意せられたと云ふ話があるが、今ではそんなラブシーンは一寸見る事が出来ないし、又学生もそんな事位ひでは兎や角云はない。ヒルムのカッチングが余程寛大になった当今、検閲官の取締が多少ゆるくなつてもよさそうなもの…。

フィツシャアさんは仲々気の利いた親しみやすい少壯外人教授で文科の学生間ではすこぶる評判がいゝ、冷たくなったお茶をぐつと飲みほしてさよならをする。芝生では青いジャケツを着たペービーサンがチョコくくと走ってくる。『バイ、バイ』と小さい手と握手して別れた。『当時の英語のカタカナ書きの傾向も表現されていて、いかにも学生の書きそうな伸びくしたインタビュー記事である。』

ウツズウォース先生宅訪問記

二月二〇日付「外人教授訪問」は「宗教々育を与へよ」と題したウツズウォース先生へ注3の紹介である。この記事も引用が長くなるが、貴重な史料なのでそのまま採録しておきたい。

「雪さえちらつく小寒い日の午後、関西学院構内の文学部長ウツズウォース氏宅を訪れる。ス



〈ウッズウォース先生とそのご家族〉
『神戸又新日報』1928年2月20日付

トープの上には舞をまふ元禄踊りの博多人形が洋室の単調を破っている。其他支那趣味の香爐や火鉢が床の上に置かれている。いつもにこやかなウッズ先生にお目にかかる。『随分市内では総選挙で騒いでいるやうですが私は外人だし、選挙権がないからあまり実際の事について詳しくは知りません。河上先生が立候補しましたが、先生は英国の政局に通じているから、当選すれば日本の政局に新味を加えることとせう』

ウヅウオース先生はカナダのトロント大学を出てからコロンビア大学に少し居て一九〇七年に、学生々活を了はった。奥さんは、クイーンズ大学を出たが学生当時学生劇に出て随分やかましく云はれたクイーンであったと。

『男女共学に就いてですか？将来は仁川に移ってから、徐々に実施したいと思ひます。』『県立高女の最近の女生徒の記事をお読みになりましたか』『どうも事実とすると面白くありません。矢張り宗教々育がもつと行はれなければなりません。男女間が引裂かれているからこんな問題が起つたと云ふ訳でも有ません。何分日本の学校は家庭から通っている生徒が多いんですから、あんな問題は家庭にも大きい責任がありますでせう』『フワイヤープレースの火が漸く燃えさかってきた。』

『学校を出る時の所感ですか、何分私は学校を卒業するなり日本へやってきましたからー自然な気持でしたよ。日本へ上陸するまで日本に就ては何も知りませんでした。唯日本に就て話してくれた平岩さんを信じ切っていたのです。学院へやって来た時分には文科の学生は唯の一人でした。今は仲々二百人を目標として建た校舎が今は三百人も収容して、毎春の受験者は定員の八九倍にも上る始末です』

『私の日常生活はこんなものですよ』と言って日記帖を開いて示された。建築委員会、礼拝、学生との晚餐、この三つの予定が毎日繰り返しくりかえしされている。

『私の生活は単調ですよ、マイ、ライフ、イズ、クワンセイ、ガク顔！』先生の顔は心持ち緊張して赤く強く紅潮していた。』

ロバートオーエン研究の北野教授

四月二日付紙面には、「ロンドンに行く北野教授、友人の祈りと寄附でロバートオーエン研究」の見出しで、異色の洋行記事である。当時の同窓生の快挙を垣間見ることができるので、次にその全文を採録しておく。

「ロバートオーエンの真摯な研究者であり熱心な紹介者である関西学院商科教授、北野大吉氏は来る四月二十四日正午出航コレア丸で米国を経由してロンドンに留学する事になった。これにまつはる美しい逸話がある。現に関学の相撲部の猛者連中を鵜匠のやうに統制している北野氏はダイサンで通っている、何故ダイサンと云ふニックネームが普遍したかと言ふと氏は学院中学部の出身である当時腕白を極めた氏の事であるから通称ダイサンは頗る有名なものであった。その当時の同級生であつた子供や弟が矢張り芋づる的に学院ボーイになつていたので、この代名詞が普及した訳である。兵庫弁まる出しの北野氏は超越意識を持たないので尊敬せられている氏が洋行の話はごく最近に持ち上つた。二人の商科の同窓によつて氏の一切の費用が負担せられることになつている。ことの起りはKといふ卒業生が、学院の永久的な事業の為に数千円の寄附をしようと思つていたが、思ひついたのは以前から問題の北野氏の洋行の話である。北野氏の研究に一新機軸を造らせる事は独り学院の為ばかりではなく、大きくは学界の為であると言ふので話は手を拍つ様にまとまつた。残された問題は研究書の購入であるオーエン或ひはモリスのレア・ブックは決して小金で手には入らない。之を聞きつけた同窓S氏は将来学院図書館に設けられるべき図書の使用数千円の寄附を引受けた。これですつかり問題が解決した。昨年の十一月東北帝大を見学して以来研究に憂鬱を感じていた氏は再び春の気分が蘇つた。氏は米国アトランター州の

写真は北野大吉教授



モモリー大学(注)この記事は誤りで、ジョージア州アトランタのエモリー大学ではないか)に入学する同窓のK氏と行を共にし、更に渡英後ロンドンに滞在しブリティッシュユミュージウムに行き傍らレアーブックの収集に勉めるそうである。ロバートオーエンを生活する氏の行は多くの同窓学生祈りによって護られている。」

なお、五月二八日付紙面には、当時関学教授であった柳宗悦の「朝鮮の芸術」という講演要旨も掲載されている。

原田博士と青木倫太郎教授

五月二一日付の「月見ヶ丘から」というコラムに、学院が新しく迎えた教授紹介の記事が出ていた。おひとりは学院育ちの原田博士(注4)である。すなわち「氏は学院卒業後米国の大学で専心研究を積まれた人、でっぷりこえた人で講義を聞かなくても壇上に立った先生の顔を見ればなにか力強い魅力を感じる。まじめな人である。」とある。

もうおひとりは青木倫太郎教授である。次のように紹介されている。

「氏は同じく学院卒業後米国の大学に入り、四ヶ年間を会計学の研究に費して歸朝した学院が誇りとするに足るまぢめな学徒の一人『会計学の研究内容は決してはづかしくないものでなく今迄の所謂日本の会計学の大家といはれる人達の研究は古い会計学は理論と実際からこれが研究に入らなければうそだ、筆記萬能の原則を応用した会計学の講義は全然価値のないものだ』といふ

ことを強く主張されておられる。強い意見をはくだけ其の内容のある人である。」

そのほか、二月二〇日付「綽名展覧会」という雑報欄に、「A虎、関学時實教官」という文章も出ている。

「この虎は仲々古い虎、陸軍後備中尉、勲何等金鷄勲章、目下関学高等部の体操の先生、年中黄色い虎の皮の様な軍服を召して居られる厳めしい口髭こそ百獣の王たるしるしなり」

なお、翌年の日付になるが、事実上、一九二八年当時の先生方を紹介した二九年一月二五日付紙面があるので、こゝに収録しておきたい。

その見出しは「『代ヘン』を感じくとロールを持って覗き歩く」「起立して迎へさすベーツ院長夫人」という記事である。これは、学院生による「われらの学校、ある学生の手記」である。

「外人の教授はミッシヨンの学校だけに余る程ある。ベーツ院長夫人は会話を教えている。夫人が教室へ這入ると学生一同起立してコレを迎へるといふ風にシツケラレルのである。タチのよくない不逞の徒が起立がシャクだと『代ヘン』を頼んでエスだと感づくと、夫人ロールを持って一人々々『ミスター・I』『ミスター・D』『ミスター・L』『ミスター・B』とのぞきこんであるく。」

ほかに「商科には田村市郎教授、中澤慶之助教授、文科には大石兵太郎教授、芥川潤教授等がキラ星の如く居並んで関西学院少壯派と言った形になっている。だが、外様大名格の講師に却って学生の人望をあつめてゐる先生もある。曰く河上丈太郎先生、曰く阪本勝先生……関西学院々外団といふところ、一人ともウツカリしている学生よりは、世間の方が先刻御承知である」とも書いている。その頃の学院生たちが、「われらの学院」と教授陣を大いに誇りに感じていた一端を窺わせる一文といえよう。

地域新聞にみる1925年から29年(上ヶ原移転)までの関西学院情報



ヒルバーン氏

『大毎慈善団時報』第5号
1931年11月10日付



ウヅウォース氏

『大阪毎日新聞慈善団時報』第6号
1932年3月10日付



ベーツ博士

〔注3〕ウヅウォース先生は、『関西学院事典』によれば、トロント

ト大学の中のヴィクトリア大学卒業後、アメリカ・コロンビア大学でM・A・取得。一九一一年に宣教師として再来日し、一三年関西学院に着任し、高等学部文科において英文学を講じる。高等学部長、その後、文学部長を歴任。三四年の大学昇格後は法文学部長となるなど、学院の教育・経営の中枢的な役割を担った。ウヅウォース教授については、このほか、『大阪毎日新聞慈善団時報』第六号、一九三二年三月十日付の「愛に国境なし、外人社会事業家の履歴」の中にもベーツ博士と並んで「学生セツツルメント、ベーツ氏とウヅウォース氏」として次のような記述がみられる。

「関西学院で外人社会事業に関係のある人々は、同学院長ベーツ氏と、文学部長ウヅウォース氏とがある。ベーツ氏は明治三十五年来朝し伝道のため甲府にあり、明治四十三年同学院教授、大正九年同院長に就任、なお同校生徒を指導して大阪四貫島に学生セツツルメントの暁明館を経営せしめている。

ウヅウォース氏は明治四十一年より来朝して今日まで長年月同学院にて活動している」

また同時報第五号、一九三二年十一月十日付では「ルンペン

の友として」の見出しで、ヒルバーン教授が紹介されている。

「現関西学院文学部教授ヒルバーン氏は、南メソヂスト・ミッションの社会事業局長で、昭和五年十一月自分の給料の一部をさいて、尼ヶ崎市中大物町にフレンド社を設立し、無宿、失業者、浮浪人の宿泊保護および授産を目的として、活動し斯界に異彩を放っている。」

〔注4〕原田博士とは、『関西学院事典』によれば、原田脩一教授で、一九二一年高等商業学部卒業、アメリカ州立インディアナ大学、コロンビア大学に留学、日本の労働問題をテーマにPh.D.を得て後、母校へ迎えられた。その後、商経学部長、学監、総務部長、理事を歴任され、とくに戦後は神崎院長時代から「総務の原田」として、各院長を支えた。五七年逝去。

八、「地鎮祭」(新校地移転起工式)までの動向

仁川に建てる学院の礼拝堂と「地鎮祭」

一九二八年の学院の動向のうち、まず大きな話題は「仁川移転」についてであろう。当時の新聞では「上ヶ原」への移転とはいわず「仁川移転」と表記されている。

たとえば、一月九日付では「鐘がなる」「仁川に建てる学院の禮拜堂」という見出しで、次のように報道されている。

「韻々として響く幽幻的なチャイムの音が、新らしく建築される関西学院の新礼拝堂の屋上から打ち出される事になった。チャイムの田園学舎に必要な事は且て本紙上にも説かれていたが、今度設けらるべき学院のチャイムは河上教授の発案であつて、学院の支持者たるカナダ、アメリカ

カ、日本の三ヶ国の各ミッションの手によって集められた金で鑄造せられたものであって、余韻豊かな響はひろびろと仁川一帯に伝えられるであろう。風の模様によっては遠く大阪郊外の平野にまでひろがり行くであろう。その神秘的なリズムのうちに若き学徒の純情が織り込まれると云う趣向である。」

二月二七日付紙面では、「仁川の土に聖鋤を打つ」「関学新校舎地鎮祭挙行」として、次のように移転についてのベーツ院長と小林一三との歴史的な証書調印式についても報じられた。

「永らく神戸市の問題となっていた関西学院移転問題も去る二月二十日梅田阪急事務所において、阪急小林社長と関西学院財団法人代表ベーツ院長との間に、三百萬円の証書調印が完了された。そして来る二月二十九日午前十時半より仁川移転地で二千の全学生及び関係者がよつて地鎮祭が行はれ吉岡名誉院長、並にベーツ院長の起工の聖鋤が大地に打ち込まれ基督教に範つとつて起工式が挙げられると」(注5)

そして二月二九日の地鎮祭(移転起工式)の模様についてもその日の情景が詳しく報道されている。見出しは、「仁川に大学都市の建設を夢みて」「日英米三国々旗の下に、関西学院の地鎮祭」と二段抜きで、次のような記事である。かなり長い引用になるが、当日の貴重な史料として採録しておきたい。(三月五日付)

「阪急仁川停留所から住宅のつゞくペーヴメントを、弦月の徽章付けた帽子が二十、五十、七十とつゞいて行く。フロックコートが行く、背廣が行く……。澤山の材木をのせた牛車が幾台か続いて行く――関西学院の敷地に着く。雨もよいの二月二十九日、この日、この所で関西学院の地鎮祭が挙行された。この敷地は上ヶ原浄水池の東部に当り、凡そ七萬五千坪の平地である。正門

の建られる所には、日の丸の旗が交叉されている。校舎の敷地には縦横に縄が張ってある。中央と覚しき所に、日、英、米国の国旗が空高く掲揚されて、朝風にはためいている。その国旗の下に白木造りの演壇が設けられている。二千八百の学生と、教師と来賓とが、やがてその演壇をぐるりと囲んで立った。大空は密雲こめて自然の円天井をつくり、清らかなうちにも壯嚴の感じを起させる。ベーツ院長が拍手に迎えられて壇に上り挨拶を終ると、菊地教授が聖書の一節を朗読し、次いで今田教授の祈祷があった。その頃から霧雨がシト／＼と降り出した。神崎商学部長が大要左の如き講演を試みた。

関西学院は時勢の進展に伴って今や、日本人自からの手によって経営さるべき時に近づいている。惟ふに、関西学院はたゞに神戸市の学院たるにとゞまらず、将来大阪、神戸の二大商業都市の繁栄の核心となるであろう。この仁川の地こそは、関西学院を中心として、附近の各町村を併せたる、品位と発展力ある大学都市となるであろう。関西学院はその時代を目標として進むべきである。

引き続き吉岡名誉院長を初め、来賓、教授たちが次々にシャベルを地中深く打ち込んで勢よく土塊を投げ上げた。最後に柳原牧師発声で関西学院の萬歳が三唱された――雨はまだ降りしきり、はるか、中学部の敷地のあたりはもやたれこめて景色もさだに見えわかぬほどである（S・

T）〔注6〕

〔注5〕学院史編纂室の池田裕子氏の調査によれば、この新旧校地と建物の売買契約については、

『関西学院学報』第八号、昭和三年八月十日号（学院史編纂室所蔵）では次のように記録され

ている。

「昭和三年三月二十日付を以て関西学院現校地二万六千七百余坪及建物四十余棟全体を参百貳拾万円で譲渡し上ヶ原の新校地七万坪を五拾五万円で譲受くる契約書に関西学院社団代表者兼院長シー、ゼー、エル、ベーツ氏と阪神急行電鉄株式会社代表者小林一三氏と署名捺印し正式に契約書の爲取替を完了したり」

なお、以下、^{へ注11}までの^{へ注}はすべて、池田裕子氏のご教示により、当時の『関西学院学報』第七号、第八号より引用・参照した。『神戸又新日報』の報道記事との異同を点検する上でも、あるいは新聞記事の特徴を知るためにも、これら『関西学院学報』の記録は重要な裏づけとなる史料である。

^{へ注6}この「学院移転起工式」については、『関西学院学報』第八号(昭和三年八月十日)でもかなり詳細に次のように報じている。

「昭和三年二月二十九日関西学院移転起工式挙行のため学院全体の職員学生々徒を上ヶ原の新校地に参集せしめたり 当時招待したる来賓中出席者は地主代表芝川又右衛門、北村吉右衛門、北村伊三郎、平塚嘉右衛門、阪急電鉄会社地所課長安威勝也、工事請負者竹中藤右衛門、設計及工事監督者ダブリュー、エム、ヴォーリス、同商会技師村田幸一、甲東村長松本長右衛門の諸氏なりき

午前十時四十五分式を始む中学部生徒は前面(東)の中央より南側へ専門部学生は前面より北側へ整列し式場へ西面して凹字形を作り来賓及学院職員は式場の後方一文字形のテント内の椅子に倚り中央に高壇を設け一脚の机を備へその前面(海の方)に紅白布を交互に巻きたる二

柱を建て頂上に縄を張り之に日(中)英(北)米(南)の三国旗を掲揚しベーツ院長壇に昇りて開式の辞を述べ讚美歌二二三番『いづくしみふかき』を歌ひ菊地教授詩篇第十九篇『もろくの天は』を朗読し今田教授祈禱を捧げ神崎高商部長壇上に現はれ『自己の所信を述ぶる』と前置して一場の演説を爲しベーツ院長再壇によりて『鋤入』を宣し其意義あるものなることを告ぐ 第一鋤入吉岡名誉院長続いてベーツ院長、竹中請負者、阪急地所課長安威氏、芝川、北村兄弟、平塚諸氏の地主代表、松本村長、ヴォーリズ氏、村田技師、ヘーデン、ウッツウォールス、神崎田中の神、文、商、中、四学部長アウターブリッジ氏、河鱈氏、竹中店下浦技師、菊地教授、三谷牧師、高橋学生会長及学生代表数名、神戸女学院代表としてストー女史、ベーツ夫人、吉岡夫人其他職員、立会者等一々鋤入し 一同関西学院萬歳を三唱して式を終れり

之より竹中現場工務所に於て学院より茶菓の饗応ありて午後散会したり」

河鱈節の「仁川に決定の日『学院挿話』」

学院移転運動を回顧する河鱈節の「仁川に決定の日」と題する手記は注目される。河鱈氏は学院移転の一切の運動を院長から委託され、二年間心身を勞した人とされ、四月九日付紙面でその手記が初めて公開された。これは、氏が近く小冊子として学院関係者に配布予定の『学院挿話』の一節『その日』の全文とのことである。「愈よ其日であった。学院移転昇格の運命を決すべき最後の理事会の其日であった」と始まる全文はかなりの長文なので、前の部分は省略し、後半部のみ採録する。それでも当日までの緊迫した状況の一端は窺われよう。

「三 (一、二の部分は省略)

萬に一つも成功の暁は……。山を後に海を前に、遙かに大都市大阪を一望のもとに、六甲山脈の山裾を囲ぐる大平原に、池に臨み、森に囲まれ、花にいろどられて、東洋一を誇る一大総合大学の大建築物。年毎に社会に送り出さる、幾千人の有爲の青年。

悠久にして朽ちざる偉大。心霊の崇高と美と力の不朽の作品。胸をどるうつくしき連想よ……。私は手短に今日の一日の問題の経過を妻に話した。

会議も愈よ絶頂に達した時であった。私は最後の或種の使命を執行して、自動車を校門で降り棄てるなり会議室にあてられた大広室の戸を叩いた。

私は静かに神崎先生を外に誘った。黙々として唯黙々として二つの影は校庭の芝生の上に立った。青葉の杜は夕闇に閉ざされて。唯幾棟の大校舎が巨人のやうに大空に聳え立つ。――先生。萬事は予定通りに、取運んで参りました。御安心を願ひます。此上は最後の御断行を願ひます。

過去一年。幸ひにして私は先生に御約束の言質は凡べて些かの間違ひ無く実行してまいりました。私は私としての最善を盡し得たとの誇りを持ってをります。

只此上は、先生に最後の御断行をお願い致します。遅疑逡巡は許されませぬ。

神を御信じ下さいませ。所謂人事を盡して天命を知る矣。此上は只神の御指図に従はうではありませぬか――。

四

長軀白髪は先生は哲人のやうに視線を空に投げられる。空には乱れ咲き輝く星の華。

私の建言の其中には直情徑行を生命の先生としては極めてあきたらない点のあるのはもとより

想像に難くはない。が、飜って『学院百年の計』と『先生の大』とを考へる時、場合によっては相当の行爲も必要と覚悟した。

と、瞬間、ざらりと先生の眼が光った。

『慥たしかにそれは善い言葉です。此上は最早神の思し召一つです……君の言葉は直ちに理事会に伝へませう』決心したぞと先生の影は再び会議室に消えて行く。私の頬には涙が流れた。萬事は此時決定したといつてもよい。

私は教授の会合に招待された。始めて幾人かの教授の方に紹介された。此度の学院移転昇格問題で、過去二年、私が如何なる役割を演じ如何なる行動を取ったかといふことは極めて少数の理事者以外には絶対秘密にされていたのだ。今日改めて菊地、河上二教授によつて私といふダークホースが表面に出されたのだ。仁川、仁川と火の出るやうな舌戦。やがて会議の終つたのが夜の十二時過ぎ。菊地、河上、柳原三教授はわざわざ、駅まで見送られた。

語る者聞くもの机を隔て、の夫婦、妻の心づくしの一抹の名香は静かに部屋にたゞよひのぼる。夜は白々と明けはなれた。立って私は戸をくつた。さつと暁の風は舞込んで来る。コーヒとパンと果物とで軽い朝食を認めしたた。子供等二人も眼をさました。

送られて私は家を出た。愈よ運命を決すべき最後の会議は再び今朝八時から続行されるのだ。可決か否決か。仁川か六甲か、雨か嵐か。私の胸には満場一致の仁川案が一糸乱れず最う此の時には描かれていた。」へ注7へ

へ注7へ「学院移転問題決議」について、『関西学院学報』第七号（昭和二年八月五日）では次のよう

に記述されている。

「本学院の移転問題は実は昨大正十五年夏季休業中忽然と或る一方の土地提供談より端を発し曳いて東西種々の方面より校地の申込あり 爾來曲折を重ね或は一時は六甲に定まらんかの感ありしが遂に左の状態に帰結しました 即ち昭和二年五月二十六、二十七の両日臨時理事会を関西学院に招集せられ中央講堂社交室に於て開会遂に満場一致を以て決定したる事項左の通」として、次のような決議内容が記録されている。長い引用になるが、当時の重大決議なので、河鱒氏の証言を裏づけるものとしても採録しておきたい。

「 決議 (原本英文)

一、左記條項に於て吾々は関西学院の財産売却及移転を決議す

(イ) 総じて将来の必要に對して充分なる校地を有する事

(ロ) 現組織の學校に對して一層勝りたる建築物及設備を有する事

(イ) 大學の目的のために壹百万円を別に備ふる事 但し移転に依つて直ちに大學に昇格せずとするとも此資本金の利子は嚴重に大學計畫の準備並其の後大學部と共に本學院の維持費に備ふるものにして現組織の學院年々の經費に當つるものに非ることの了解あること

二、吾々は參百貳拾万円を以て學院の現財産を買収する阪急電氣鐵道株式会社の提案を採用し而して適當なる承認の得らるゝ、や否や仁川ニガウに於て校地の買収に着手せんことを聯合教育全權に推薦する事

但し現財産の売却及仁川に移転は左記條件に依るものなること了解あるものとす

(イ) 出来得る限り迅速に日本に於ける宣教師團並亞米利加に於ける外国伝道局の承認を得るために全力を盡し而して校地売買の時期の必要なる延長を阪急会社に請求すること

(ロ) 本企画に於て取引の方法は阪急会社並関西学院双方の満足なる方法に拠ること

三、建築委員は建築物の研究を進んで爲すべく任命せられたる事並理事会に対して之れが報告を爲す事

四、建築委員は提供地に付て一般の予備的研究を爲すことをヴォリーズ会社に請ふために同会社に接近することを承認せられたる事並校地の作り方建築物一般の様式及価値の概算其他を理事会へ報告する事 但し関西学院の移転問題の決定するまでは此ために如何なる大出費に対しても責任者たらざることの了解あること

五、学院の代表者等は現校地に対する買収価額を完全に受領するまでは商議と移転との間に損耗のなき様学院の利益を保護せんことを欲するが故に移転に付ての取引の方法は阪急会社と共に設定せんことを求むる事」

関西学院のシニヤール・デー

学院の動向のひとつとして高等商業学部で研究科の開設案がある。当時は高等商業学部は四年で卒業することになっているが、更に一年間の研究科を新設しようとする案である。(二月六日付)

「目下今春卒業しやうとする学生に研究科に残るものを募集しているが、若し三十名以上希望者があれば直ちに来年度から開設せらる、筈。就職難の甚だしい昨今、研究科に残って静かに景気の回復するのを待たうと云ふ向がかなりにあるそうである」と報じている。(『関西学院学報』第八号によれば、高等商業学部研究科の増設は、一九二八年三月二三日付で申請し、五月八日付で文部大臣より認可された。)

また、二八年一月三十日付紙面では、高等部二百の卒業生のために、来る二月二六日、中央講堂で賀川豊彦による最後の卒業記念説教会が催され、(注8)三月九日には、中学部及び高等部並びに神学部卒業式に、特別講演として東京から新渡戸稲造博士が来学される筈と予告されている。(注9)

二月二七日付紙面では、去る二月二三日に関学商科では百五十名の卒業生を送別する「シニヤード」が催されたと、次のようにその様子を伝えている。

「午前中には式があり、卒業してゆく学生の在学中の感想や懐旧談があった。引続いて卒業生チーム対教授の野球や庭球の試合があった。狐色の芝生に、ライスカレーや関東煮、しるこ等の模擬店が賑ひ、午後は余興に入り大講堂で剣舞や音楽に、浪花節、皿廻しと玄人はだしの演芸寄せがあり、かくて学窓を去りゆく者の爲に楽しく華やかな一日が送られた」

この記事の下段には「竹中郁送別会」という記事が続いている。それによると、来る三月十五日に神戸出帆の鹿島丸でパリ大学へ留学する竹中郁送別会が関学詩人倶楽部主催で二月二六日に三宮パウリスター樓上で盛大に行われたとある。竹中氏は昨年四月関西学院を出て、しばらく北原白秋に師事していたが、渡欧後は主として、パリ大学でフランス文学史を研究予定とのこと。送別会では氏が日本を去るにのぞんで出版した『枝の祝日』を中心に詩情豊かな話はずんだという。

ちなみに、当時の卒業生も文科系は不景気による就職難だったようだが、一九二八年度の卒業後の進路について二九年一月二五日付ではその状況を次のように報道している。それによると、学院では、商学部百五十人、文学部六八人の卒業生を送り出すが、(注10)文学部では社会学科に二名の決定者があるのみという。ただ一般的な就職の捌け口としては、哲学科は教師、外字新

聞等へ、英文科は教師に相場がきまつているという。社会学科は例年通りだと会社か新聞記者。商学部では既に確定者は、日本生命、大同貿易、大正海上火災等へ二十数名のほか、卒業後渡米して留学志望者が四、五名おり、自家経営に決定者が十名位、さらに「最高学府へ向学する人」もあり、「存外かんばしい景気である」という。そして、次のようにも指摘している。

「学校出の特異な点はスポーツマンがよく売れる事である。社会から運動の結果生ずるステディな体格精神の所有者を希望する傾向が濃くなって来たため、学校の成績よりも完全な人間を要求せられている。(関学) 当局では、『まだく成績に重きを置いて要求される所がありますが、寧ろ学校当局を信頼して頂き、成績よりも各個人の性質に基いた要求を入れて頂きたいものです。個性の流れを長く見ている学校当局は一人くをよく理解出来ていますから』と語っている。」

今日と似たような状況も読みとれて、就職事情を知る手がかりとなるが、今日との決定的なちがいは卒業生の数の圧倒的な差という点であろう。

〈注8〉『関西学院学報』第八号(昭和三年八月十日)では、「関西学院第三十八回卒業式」「卒業生へ与ふる説教」として次のように報じている。

「昭和三年二月二十六日(日曜日)午後二時中央講堂に於て賀川豊彦氏『誰か大なる』てふ題下に説教を与へられ名望家の説教とて当日聴衆は例年に彌増して多数出席、卒業生を始め一般の参集者氏の深奥なる説教に傾聴して感激し益するところ甚大にて何れにも満足を与へたる会合なりき」

〈注9〉また、三月九日の第三十八回卒業証書授与式については、「儀式の順序は例年と異らず卒業

証書授与、賞品授与、院長訓示に続いて本日特に東京より招聘したる法学農学博士新渡戸稲造氏の卒業者に与ふる世上の通弊を論じ其適切なる教訓的講演あり続いて来賓よりは兵庫県知事代理佐藤学務部長の祝辞朗読次に神戸市長代理、同窓会代表の祝辞其他学生代表の祝辞、卒業生代表等の答辞等あり盛会裡に式を終り社交室に於て軽餐の饗応ありたり」と記述されている。(『関西学院学報』第八号)

〈注10〉『学報』第八号では、一九二八年三月九日卒業生数を、「中学部 百四名、高等商業学部 百三十名、外聴講生一名、文学部 六十三名(内訳、英文学科 五十二名、社会学科 十一名)、神学部本科 二名、外聴講生一名、同別科 六名、計三百七名」と公表している。この学院の公表数字と比較してみると『神戸又新日報』記事の卒業生数はかなり間違っていることがわかる。

九、一九二八年の課外活動での活躍

学術・文化・芸術活動の活発な展開

年頭の一月十二日から十五日まで四日間、兵庫県下専門学校学生連合美術展覧会が大丸呉服店六階で開催され、関西学院は当番校となっている。紙面では、学院生の吉原三二郎「肖像A」の作品が紹介されているが、「関西学院は弦月会の名を以って既に可成り古い歴史を持つており」と書かれ、弦月会の活躍が既に広く知られていたことがわかる。

この美術展についての短評欄には、たとえば「吉原氏、肖像二点は場中ピカ一の観、氏の堂々と正面から切り込んで行く腕と態度には敬意を惜しまぬ」と絶賛されている。(〈注〉池田裕子氏

の調査によれば二八年三月に吉原治良が高等商業学部を卒業している。吉原氏は明治三八年生まれなので、三八郎とはそれをもじった学院生当時の雅号ではないか、とも思われる。）

また、弦月会の評価の高さは、「春陽会と国画会創作展に、三名の入選者を出した関西学院弦月画会」という記事にも読みとれる。それによれば、北村今三は「神戸風景」、春村たゞをば「塩屋風景」で堂々春陽会に入選し、川西英は創作版画「曲馬」「静物」「途上」の三点が国画会展第一部の陳列室に異彩を放っている、という。いずれも三、四年前まで学院高等部にいて弦月会で活躍していた同窓であった。（四月三十日付）

一月二一日午後七時から、関西学院語学部主催の第五回全国学生懸賞英語雄弁大会が開催されている。その模様は次の通り。

「大講堂の正面には日の丸を中心に、ユニオンジャック、と星條旗の日英米の三国の国旗が堅く握手を交している。階下は殆んど満員にて、数十名の女学院の学生を始めとし、詰めかけた多くの婦人の聴衆が異彩を放ち、既に定評ある本大会にフワンの出来たかの観がある。小野寺君の司会のもとに開会せられ先ず青山学院の平野君が演壇に昇って『極東の眠れる獅子』と題して、……」

まさに、「英語の関学」の活躍ぶりは、当時すでに第五回の全国学生英語雄弁大会を主催するほどの勢いがあった。結果は、一等は三高の岡林君「我等は何を爲すべきや」、二等が関学山口君「洋々たる昭和時代」、三等は神戸高商の大森君「社会文明」と発表され、「拍手のうちに、それぞれベーツ院長から大カップ並に大金牌の授賞があつて会は閉じられた。」（一月二三日付）

さらに、一月二八日には、大毎ホールで関西学生英語連盟の第二回英語雄弁大会が開かれ、参加八校のうち、学院の桑原、山口の二人が優勝、個人賞としては、学院の桑原君が一等賞に輝い

ている。(一月三〇日付)

一方、この日の午後二時から、三宮パウリスター樓上で、関西学院詩人倶楽部の主催で文芸座談会が開かれた。まず、倶楽部発行の詩誌『木曜島』の合評をやり、「引続いて一九二七年より一九二八年への文壇新展開の予想について漫談が賑うたが、其筋の監視がきつかったので任意解散した」という(一月二三日付)。「監視がきつかったので」解散という文脈が注目される。

他方、一月二三日には、高等部では中学部グランドで、軍事教練の師団より派遣の某少將の査閲が教官古賀中佐の指揮の下に行われる筈、というベタ記事もある。「同校は、昨年九月より実施されたので未だ銃器がそなはらないので全部丸腰の兵隊である」(注11)と書かれてあるのが面白く、皮肉だ。(一月二三日付)

〈注11〉池田裕子氏の調査によれば、この「学生教練査閲」については、『関西学院学報』第八号(昭和三年八月十日)で次のように記述されている。

「昭和三年一月二十三日第四師団より関谷陸軍少將査閲官として来院せられ学院専門部学生の教練を査閲せられ而して翌二十四日又中学部生徒の教練を査閲せられたり 本学院に於ける陸軍將官の教練査閲は之を以て嚆矢とす 蓋しその講評は可とせられたるものある一方学生々徒の一層勉勵すべきもの多々あるを示されたり」

なお、同『学報』第七号(昭和二年八月五日)には、「専門部教練開始」という記述もみられる。軍事教練が強制されてきたこの当時の時局の気運の進展を窺わせる記事である。

「本学院は中学部の外専門部(神学部を除き)に於ても学生のため軍事教練の必要を感じ予

て出願のところ昭和二年五月二十五日付歩兵第七十聯隊付陸軍歩兵中佐古賀用六氏本学院に服務を命ぜられ続いて六月六日着任せられ爾來教練及該執務に従事せられ又学院長宛に懇切に建議せらるゝところあり何分にも本学院には兵器の準備無きを以て目下其筋の官庁へ銃其他の私下出願中であります 従つて今後は中学校と共に専門部に於て著しき教練の効果を収むることを期待します」

この頃から「兵器の準備なき」本学院においても配属將校の指揮の下に、「丸腰教練」が実施され始めたのだった。

また、この紙面の「新刊紹介」では、学院山岳部発行のグラビア写真多数挿入の「美麗なる雑誌」『六甲』が創刊された、とある。主な読物は、「スポーツとしての登山」奥野重美、「山岳賦」藤木惇、「山岳雑誌」杉田栄一、「スキー杖について」橘眞琴、希望者には五十銭にて頒布とのことである。

二月十一日には、中央講堂で文学会主催の第二回文科祭が開かれた。劇研究会の二、三の劇をはじめ、各音楽部総出の演奏、詩の朗読、映画と「お隣りの高商の興味本位に較べて、こゝは芸術へ芸術へと精進している」（二月六日付）と前評判も高い。二月十三日付紙面では、文科祭の模様を次のように描写している。

「美しく着飾った男女が続々と赤く灯のともったオーデトリウム目差して集まる。殆ど会場が一ぱいになった頃、波多野文学会長が拍手に迎へられてステージに立ち、一場の挨拶を述べた。グリークラブのクワルテットでカレヂソングが唱はれて、先ず芸術の園への扉は開かれた。

ドイツ民謡『蛙』が男声四重奏で唄はれ、次でマンドリンクラブのスペイン狂詩曲の合奏がある。学生の催しに対して興味を持つシンバリスト、世界的名手、バルナー氏の賛助出演がある。トラビータ、カルメンとポピュラーな曲目に聴衆は思はず引入られて首振って調子をとっている。演奏は終わったが暫らく鳴り止まぬ拍手にアンコールされて、再び舞台に立って『荒城の月』を演じ終った。オーケストラのスペインの『小夜楽』がすっかり聴衆を踊り場気分に捲き込んでしまふ。岩崎君の詩の朗読があったが、余韻がないので徒らに聴衆を笑はせるのみである。明澄な昔調でウヅワースの詩の朗読が爲されて第一部は終った。」

つづいて『あの山越えて』の諷刺劇、次で余興劇「火山に崇られた話」。そしてキネマ倶楽部の弁士たちの登場等々、「拍手と歓呼」のうちに終了となった。かなり大々的な楽しく芸術的な「文科祭」であったようだ。

講演部と学生会による巡回文化講演会

講演部も例年通り、五月に春季講演旅行を行っている。敦賀、福井、金澤の三市で学術講演会である。同勢は文学部大石兵太郎教授以下学生十一名で、主な弁士と演題は次の通りとなっている。(四月三〇日付)

藤田四方治「高度発達期における資本主義文明とその特質」、赤松千年「新自由主義に立脚して現代世相を論ず」、梶野武「現代社会に対して中世ギルドの持つ意義」、阿江信三「各国の外交政策と弱小民族の解放」、岡崎三男「所謂外来思想と国民性」、山下登「学問性の歴史的二転向に於ける神秘」、木村定「宗教の本質とその科学的批判」(注12)

〔注12〕当時の講演部の活動はめざましく、このほかたとえば、学院および神戸高商、神戸高工の三校講演部で、すでに数年来、三校連盟講演会なども開催している。二月二十一日には、神戸高商との二校で学院大講堂で学術講演会が開かれる。その日の司会者は宇都宮信哉、関学側弁士は、蓬萊信一「社会科学的研究における学生問題」、仙波安「法と人」、赤松千年「入学試験制度廃止に際して」、北川敏男「トルストイの百年祭に際して」、小川清太郎「階級社会と権力」、閉会の辞を十河巖が担当予定の由。(一月十六日付)

また、六月八日付紙面の各部近況報告によれば、講演部は『突貫主義』『リベリズム』を会旨としているだけに、会員は皆元気があり、男性的だ』という。放課後は必ず数名の者が壇に上って、ドラ声を張りあげて自己の所信を発表している。「彼らは未来の代議士、第二のシセロ、ルーテルたらんと欲して日夜励んでいるのである。河上先生の後継者が彼らの中から出るだろう事を祈りつつ隣の部室E S Sを訪れた」と部室訪問記に書かれている。

こうした恒例の関学巡回講演は、高等部の自治会である学生会も行っている。すでに学院の年中行事となっているこの文化講演旅行は、当時の満州、朝鮮を始め、中国地方や九州、四国、近畿、中部地方と、その足跡は西日本全地域に及び、この学生会による巡回文化講演も今や世人の注目する所となっており、この夏は暑中休暇を利用して、「多年の希望」である北海道方面と決った。

「本年は学院の思ひ出深い月見ヶ丘・原田の森にいる最後の年であるので一同の意気高く、多方面より期待されている」(六月十八日付)

参加者は、教授側より、神崎商学部長、大石文学部教授、東商学部教授の三氏で、学生側は平山会長をはじめ、笠原、北川、桑原、小池、西、鶴、小国の八名で、七月二日神戸発で、弘前、函館、小樽、札幌、旭川等で講演会を開く予定とのことである。

この文化講演の旅の第一信が七月十六日付に載っている。その一部を採録しておく。

「目的の弘前市に着いたのは晩の十時半、直ちに今夜の宿泊所となった東奥義塾の寄宿舍に向ふ。翌日、市内を見物しながら『びら』を配る。此の地方の言葉の分らないには閉口したが又、美人の多いのにも驚いた。市の公会堂にて六時半から講演する。心配していた聴衆も三百人許りも来て可成りの盛会を収め得て嬉しかった」「当夜十時三十分の列車にて函館に向ふ。昨夜神戸を立った野球部と同じ汽車となり、一同大いに元気づく」

「五日朝五時函館に向ふ。午後と午前の二回に市内を見物しながらビラを撒く。洋館建のずらりと並んだ様は大都市の風を備へている。東京の文化は東北地方を飛び越えて、北海道に移されたのではないかと言ふ感じがする。当地に於ける講演会は函館新聞の後援を得て非常な盛会に終る。聴衆一千人余場内に溢れる程であった。一同大いに元気づくも十時四十分閉会、宿に向ふ」

(列車にて仁志生)

忙しいスケジュールながら、大好評の巡回文化講演の旅だったようである。

先駆劇場と戦旗座による演劇活動

学院の劇研究部(劇研)から二八年には、ふたつの新しい劇団が発足して競い合った。ひとつは、先にその研究会を母体に現役学院生と卒業生で新しく結成された「先駆劇場」である。

そのスローガンは、「演劇は絶えず進展する社会と時代とに対する最も相応しき芸術である。我等は此の演劇を把握して民衆に対し、明朗清新なる生活意を与えることを目標とする」と謳っている。十四名の同人を中心に、機関誌月刊『先駆劇場』も刊行、二月号は、二月十八日に朝日会場でエルンスト・トルラーの『解放されたるヲオタン』を公演予定とのこと。さらに、ルナチヤルスキイ『解放されたドンキホーテ』、ルイヂ・ビランデルロ『ヘンリイ四世』、ラインハルト・ゲエリンク『スカバー・フロー』、イリヤ・エレンブルグ『風』、ユウジン・オニイル『楡の木蔭の欲望』、マノルツイバアシェフ『野蛮人の法律』、ゲオルグ・カイザア『欧羅巴』等々を演出予定とあげている。(一月十六日付)

この先駆劇場を脱退した劇研究会の三木、南部、由山らを中心に「戦旗座」が結成され、六月六日夜、大阪朝日会館で行われる新興劇団連合によるル・メルテル作『炭坑夫』の公演に参加することになった。この上演の訳者である東京左翼劇場の佐野積の指導を受け稽古を続けているといい、この連合公演後、「戦旗座」、「群衆劇場」の全部等が合同して「大阪左翼劇場」を結成する予定という。

当時の東京・大阪等における左翼演劇活動の活発化につれて、学院にもこの種の演劇集団が次々と生まれ、互いに熱演を競い合っていたことも興味深い。

「教室から街頭へ」社会施設研究会の活動

「学の殿堂その開放」「象牙の塔その解脱」の気運を背景に、学院にも新たに「社会施設研究会」が生れた。その目的は「学校内の課業に満足せず進んで実社会の凡ゆる点―例へば社会の

各階級の状態又は、種々なる会社工場の見学——其研究並びに観察、実際に活きた体験、智識を得やうとの企て」である。

阪本勝(県議)、河上丈太郎(代議士)を顧問として、月二回の見学会と研究会を月一回の計画で、第一回は五月十日商船学校を見学した。その後の見学予定は、少年審判所、控訴院、裁判所、刑務所、不良少年教育所、造船所、川西製作所、川崎造船所、造幣局、軍艦、商船、新聞社、鉱山、紡績会社、ビール会社、神戸新川地方、貧民窟、有田ドラック等。(五月二二日付)

また、第一回研究会として畑教授の『不良少年少女』についての講演を聴き、十九日には茨木の「浪速少年団」を見学した。

五月二四日には、ユニオンビールと森永製菓を見学、今月中に川崎造船所、国立移民収容所、堺刑務所、日本航空(株)、大朝大毎両新聞社を見学予定。(六月六日付)

このほか、様々な課外活動が行われているが、たとえばフランス語科の学生五十人は工藤教授につれられて、五月十七日、神戸港内に碇泊しているフランス軍艦『アルタイ』号を訪れた。その目的は「われらの流暢なフランス語が、どのくらいフランスの軍人に通用するか」をためすためだった。(五月二二日付)

さきにもふれたように、当時の「英語の関学」を表徴する行事は絶えず開催されている。たとえば、六月六日には中央講堂で関学、神戸女学院、神戸高商及びハワイ大学四校連合の下に、日米親善英語雄弁大会が開かれた。あるいは、語学部では放課後集ると誰でも英語で話さなければならぬ、という訓練を連日くり返している。

また、六月二五日付のトップ記事に「日米学生間に固き親交の楔打つ」「関学英語懸賞雄弁大

会」「真摯な熱弁ぶり」という二段抜きの見出しが出ている。つまり、「日米親善賞金壹百円争奪英語懸賞雄弁大会」という日本ではじめての珍しい宣伝ビラが学院生によって神戸市内に撒かれた。その理由は、南メソヂスト大学が、今回日米学生の親善を促進するため、関学に毎年周期的に金五十ドルを送金することになり、その条件として「関西学院内の学生間の英語演説の賞金として使用すること」となっている。この入賞者の原稿は南メソヂスト大学に送られて大学新聞に発表される。

この最初の大会が六月十五日夕、学院中央大講堂で開かれた。参加者二十一名中より、予選で選出された十二名の学生が決戦コンテストを行うという趣向であった。集った聴衆約一千名を前に、語学部長桑原義雄司会、ミックル教授の「南メソヂスト大会贈与金の説明」の後に、各自熱弁を振り、当日の入賞者が次のように決定、表彰された。

一等賞（賞金五十円、賞状、優勝旗）神学部五年生山口清「人道的宗教」、二等賞（賞金二十五円、賞状）商学部二年宮川富雄「深き思想へ」、三等賞（賞金十五円、賞状）商学部三年佐藤鑛三郎「世界は正義の上に再び建設すべきである」、四等賞（同十円、賞状）商学部三年木村弘實「現代青年の任務」

ちなみに審判者はミス、メリー・ストウ教授（神戸女学院）、ウツズウォース教授（関学文学部長）、原野教授（関学神学部）である。

十河巖はじめ学院生たちの文化活動

この頃の「学生又新」紙面の報道を担当した学院生の学生記者・十河巖の活躍はとりわけめざ

ましく特筆に価する。署名入り記事や作品だけでも多数に上り、たとえば「俸給生活者と社会科
学」といったコラムをはじめ、「『学生又新』の編輯について」書いた「回想と希望」(三月五日
付)など同紙面の有力記者ならではの回想が綴られている。

「原稿は金曜日までに持ち寄って土曜日に編輯し日曜日の午後、大組に組み込んだ。或時は、
この原稿を書くために阪急梅田から上筒井、そして市電で又新日報社まで、この間一時間余りの
間に、電車の強い震動のうちに四十三枚余の原稿を書いたこともあった」という。十河の編集方
針は、せめて週に一度だけでも真に明るい好い記事を載せることであり、「僕は今春学校を卒業
してゆきませんが、新しい学生諸君がどしどしと之に参加してこの紙面を面白く造り上げられる様
に願ひします」と結んでいる。十河のほか学院生からは当時、増井登、村田秀治郎らも編輯同
人として名を連ねているが、これら諸君の熱心な取材活動によって当時の学院や学院生の動向や
知られざるエピソードが記録されたことは、これもまた重要かつ貴重な課外文化活動であったこ
とを強調しておきたいと思う。

文化・芸術活動の一環として、当時の学院も学生と市民を結ぶ各種講演、公開講座、そして音
楽会の数々を開催しており、紙面で紹介されたものもごく少数にとどまり、それでもそのすべて
にふれることができなかったが、たとえば、六月九日には、学院ハモニカバンドの創立五周年の
記念演奏会が中央講堂で開かれた。曲目のみ列挙すると、(一)、ハイドン「驚愕交響楽(交響楽第
六番)」、(二)、(A)ペクツチ「愛の微笑」、(B)ヤーネフェルト「子守唄」、(三)、ハーマニカ独奏・東山
国三、ロバート「アルゼンチンの美女(タンゴ)」、(四)、レハール「メリイ・ウイドウ」(円舞曲)
(一)、ロッシニ「歌劇セヴィラの理髪師」序曲、(二)、ハーマニカ二重奏、小寺一夫・東山国三、

(A) クイ「東洋の歌」(B) リムスキイコルサコフ「印度の歌」、(三) コテラ編曲「京鹿子娘道成寺」、(四) チャーマン「戯曲ヘンリイ八世」の三つの舞曲、(A) 「モーリス・ダンス」(B) 「牧人の舞踏」、(C) 「炬火の踊り」指揮・小寺一夫、となっている。

あるいは、十月二十日には、「音楽と舞踊の会」が中央講堂で開催されるといふ予告記事が載っている。この目的は「仁川に移転後在校学生の仏語勉学の便を図るために仏語参考書・辞書等の購入費募集のため」である。

また、七月十七日には同じく中央講堂で、早大管絃楽部が来学、演奏会が開かれたが、これは早大校内に建てられる日本最初の演劇博物館建築基金募集のためである。スポーツの交流と共に、学院と早大とは戦前から各種交流が密であったことの一例であろう。

七月十六日付と次週に亘っては関西学院・エンヤ生の署名で「レコード・ファンの追憶」「ベートウベンの子ナタと歌曲―吹込の悪い盤の標本―」といった本格的なレコード評論も連載されている。ラジオの熱心な研究者として知られる学院生・笠原功一のラジオ論などと同じく、「学生又新」では、個性豊かな学院生の評論や詩などの作品を積極的に取りあげ掲載したことも、紙面を楽しいものとしてしているばかりでなく、その背景にある当時の学院生活の広がりやゆとりを感じさせる情報ともなっている。

十、一九二八年のスポーツ活動記録

運動部ナンバー・ワン列伝



中村文夫君

学院運動部のこの年最大の出来事は、いうまでもなく、四月五日の大阪毎日新聞社主催第五回全国選抜中等学校野球大会に、中学部野球部が見事優勝を達成したことであろう。その副賞として、その後米国遠征した経緯も含めてこの間のニュースは、『大阪毎日』はもちろん『神戸又新日報』はじめ各紙で大々的に詳しく報道されているので、この快挙については本稿では改めてとりあげる必要はあるまい。

その他のスポーツ活動記録についてここでは注目し、採録しておきたい。

「学生又新」の特集記事として、二八年一月二三日付紙面から「ナンバー・ワン列伝」というコーナーで、関学スポーツの各部のいわばヒーローないし第一人者を次々と登場させている。そのトップは、庭球部の中村文夫でその副題は「悪戯失敗の思ひ出」である。ナンバー・ワンとしての戦跡を紹介しつつ、そのクラブ活動での裏話ないしエピソードを披露しようという企画である。

「去年の春、五月、関西選手権大会でデヴィス盃戦選手三木に戦ひを挑んで、物の見事に之を撃破して以来『文さん』の名は一時に高くなった。『神さん』でも乗り移ったんだよ」と本人至って謙遜している。名古屋の東海中学出身であるが、中学時代はほんの遊び半分で軟球をやる位だった。けれども学院の人となつてから春と夏の猛烈な練習で見る見る文さんの腕はさえてきた。」

「彼は遂に日本庭球選手ランキング十二番の席を占めることが出来た。学院の庭球部の練習は猛烈であるばかりでな



今北繁雄君

く、規律が非常に厳格である」と当時の庭球部のきびしさを如実に伝えている記事であり、同時に「文チャン」と友人たちに親しまれた純情なスポーツマンの一面が語られている。

第二回目は、野球部の巻で「省線を三度廻った」「名投手今北君」の登場である。

「今北繁雄君は中学部出身の生え抜きの関西学院ボーイである。練習で真黒になった顔をニコヤかに輝やかしながらベーカント・クラスルームの燃えさかるストロブを挟んで語る」「彼は武骨と思はれる位ひ素朴な青年で学院高等部の人気者です。大正十年の夏全国中等野球大会で優勝した澤君の後を受けて、兵庫県の子選大会に出場したが二回戦で惜しくも破れた」「今北君は引続いて高等部に入学し松田監督の厳格なコーチの下に、先輩の激励を受けながら、高等部の野球

部の黄金時代の建設に勉めた。松田監督の命令一下、部員一同はくりくりと頭を丸剃にしてしまった。部の気分は一時に緊張した大正十四年の夏、全国の高等専門野球大会には物の見事に大優勝旗を弦月の傘下に収め得た。」

この素朴な好青年が、去年の夏、対早大定期戦の帰り道に牛込から目黒まで帰るの



寺田辰夫君

に、省線を三度廻ってしまったという失敗談である。(二月三十日付)

第三回は、競技部の「ハンマーマン・寺田辰夫君」で、彼の白いユニホーム姿は、いつでも高等部のグラウンドにあり、どんな日でも彼の姿を見ない日はない、という書き出しである。「寺田君はハンマーマンとして、過ぐる大正十三年の明治神宮の競技会で見事に新記録を作り上げた巨漢ノ至って磊落な六尺豊かな快男子である。愛嬌あふれる彼のカレヂライフは、逸話と笑話に満ている。」また「弟が目下早大にあつて、ラグビー部のフッカーとして旺んに活躍し、その次弟は昨夏全国優勝した静岡中学の捕手として名声を博した。更に妹さんも庭球に精進されていると。一家揃って運動好きのスポーツの家である。」(二月六日付)

当時の学院にも、スポーツ各分野で日本を代表する第一線級選手が数多く在学し活躍していたことは、まさに壮観といった印象である。つづいて第四回のナンバーワン・ワンは、相撲部の「運動八芸に通ぶ・吉田保君」の登場である。

「吉田君は商業学校に居た時分に、既に本社主催の須磨の相撲大会で第二優勝を獲得したことがあ



吉田 保君

った。関西学院に入ってから各地の大会に出て殊勲表した。君が一年の時代、大濱の大会で関東方の横綱で二十八貫と云ふ大兵早大の夏秋君を一蹴して全勝の名を成さしめず番狂はせを生ぜしめた。翌年の名古屋での東海相撲大会でも矢張り東京方の横綱杉村君を投げて、之また、百年の恨みを喫せしめた小兵の快漢である。

が然し、去年の春以来運動部長の重職に担がれて、おしまれつ、角力部から引退して一意十一部に別れた運動部の統轄につとめてきた」という。趣味はレコードを静かに聴くのが何よりで「嗜好品はアスパラガスに、トマトにバナナ、概して柔らかいものを好むと。」ところが、運動となると庭球、柔道、相撲は勿論、水泳、競技、野球とスポーツ万能選手である。そのことからまさに運動部長の資格があると紹介されている。

各運動部の活動状況報告

この年四月二三日には学院運動選手表彰式が講堂で行われた。その技量とスポーツマンシップの両方面からみて、三〇四名の運動選手の中から次の二六名が選ばれた。

〈野球部〉岡島正太郎、松本善高、木村秀一

〈角力部〉岡添寅吉、安田保、松浦政治、唄野政一

〈庭球部〉井上七十郎、森川高一、神代俊男、上原増雄

〈蹴球部〉平山政市、米澤理一、青木義隆

〈競技部〉三宅正巳、寺田辰次郎

〈剣道部〉松本敏夫、山根初太郎

〈柔道部〉田中幸雄、橋本真砂、藤井三佐夫

〈弓道部〉菅沼至

〈水泳部〉石田恒信、杉原茂

〈籃球部〉坂上敬一、澤田修太郎

(以上二六名)

(四月三〇日付)

また、今年度から新たに射撃研究会が生まれ、三浦教官指導の下に毎週月水金放課後、中学部グラウンドにおいて練習を開始する、という記事や、山岳部が「水曜岩登り練習会」で五月十六日、杣谷奥にて練習を行い、十九日は篠山まで行き、三嶽按部で幕営したというベタ記事も出ている。(五月二二日付)

水上競技部は、広島高専学生水上競技連盟との対抗戦のため六月七日神戸を出帆した。「世界的に其の名を知られた石田君を有する吾水上競技部は、恐らくめざましい活躍を示すことだろうと期待されている」(六月十八日付)。この結果の報道はないが、九月十六日に開催された関西学生水上競技連盟主催の大会(於大阪市立運動場プール)での決勝記録では、千五百米自由型で一着菅沼、二百米自由型で一着松本、八百米リレーで一着関学チーム(野村、石田、菅沼、松本)十分三二秒六、となり、結局関西学院が七五点の断然トップで優勝している(二位、同志社六四点、三位、京都帝大三七点、以下、神戸高商二〇点、名古屋高工九点、大阪商大八点、関西大学

となつてゐる)。(九月十七日付)

六月十八日付紙面では、この頃の学院運動部の近況を次のように「のぞ記」している。

「陸上競技部は、ユニフォーム姿勇しく盛んに妙技を振るつてゐる。傍らでは、バスケット・ボールのチームが、スマートな風采で練習しているのが目に付く。商館前の、芝生では、フットボールの横綱軍が、盛んに活躍して居るかと思ふと、一方寄宿舎傍の弓引場では古典的な服装をした紋付の羽織袴がネラヒを定めて居り、角力場では、大の男が取組合つてゐる」

なお、こうして活発な活動をつづけている学院運動部では、その基金募集のため六月二三日午後二時と七時の二回、学院中央講堂で「音楽と舞踊の会」を開催している。

「舞踊は斯界の新人中第一人者と称せられている藤間静枝氏とその愛弟子蔦枝氏、音楽は山田耕笹氏(ピアノ)を始め黒柳信綱(ヴァイオリン)、四家文子(アルト)、浅野千鶴子(ソプラノ)といふ名手揃ひである」(会員券は、三円、二円、一円の三種)。

この運動部主催「音楽と舞踊の会」は昼も夜も「はちきれ程の人」だった。歌も踊りもヴァイオリンもピアノもすべて山田耕笹の作品ばかりを演奏したとのことで、山田耕笹と学院との深いつながりがこのコンサート開催にも窺われる。学生記者の短評では、「四家文子さんの独唱『おろかしく』などはよかった。藤間さんのは凡て小品的なものばかりだったが、それでも独特の気品と幽婉な味とがあふれていた」とも書かれている。とにかく盛況で基金募集という目的は果されたようである。(六月二五日付)

この夏休みも各部遠征試合などを行っているが、たとえば弓道部は、当時の満州、朝鮮遠征に向けて、七月四日大阪商船アメリカ丸で神戸出帆、七日午前大連に着いたと報道されている。日

程では、八日に満鉄本社軍と試合、その後遼陽鞍小連合軍、奉天軍、撫順支部軍、長春、安東等々にて試合し、二三日神戸着となっている。(七月八日付)

秋の大毎主催全国学生相撲大会(専門学校、大学の部)は十一月十八日、堺の大濱土俵で開催、団体戦では学院は準々決勝で慶大に三対二で惜敗した。しかし、個人優勝戦では、学院相撲部からは、松浦、安田、岡添三君が準々決勝まで進み、松浦選手は準決勝まで残ったが、惜しくも四位となった。(十一月十九日付)

なお、関西学生スキー連盟による第二回スキー競技大会は、二九年一月二〇日神鍋山で開催、学院からは、スラロームで秋山が優勝、四人一組のリレーレースでは、二等賞を獲得している。以上、新校地移転を目前にして、各部それぞれに健闘していた様子が紙面にも断片的にはあるが記録されており、その後上ヶ原の地でさらに一層の活動が展開されていった。

〈あとがき〉

本稿執筆・校正に当っては、とりわけ脚注など学院史のさまざまな人名・事項の調査すべてについて、学院史編纂室の池田裕子氏に大変お世話になり、多くのご教示をいただいた。本当に有難うございました。

また、本稿執筆の機会を与えていただいた室長、事務長及び室員の皆様には、貴重な所蔵資料をみせていただき参照させていただいたことにも謝意を表したい。学院史の一端を改めて学習し直すよい機会ともなり、専攻領域の関心を越えて勉強することができた。

『神戸又新日報』^{ゆうしん}は今ではすっかり忘れられ、「幻の新聞」となりつつあるが、戦前の神戸をはじめ兵庫県域紙としては最も有力な、全国的にも評価の高い人気のある新聞だった。たまたま、同紙の掲載記事を手がかりに、メディア・イベントとしての神戸における博覧会の歴史を調べていたところ、他紙と比べ、学院関連記事が比較的多く掲載されていることに気づき、そのことを池田裕子氏に話したことが本稿執筆の直接のきっかけとなった。また、本稿が対象とした時期に『神戸又新日報』では「学生又新」という独自のページ企画が登場しており、このページの編集を担当した学生記者の中で、十河巖氏はじめ学院生記者の取材活動が活発に行われたことも注目される。そして今や「学生又新」は、原田の森時代の学院関連記事ばかりではなく、当時の神戸市域全般の学生文化状況を知る上でも欠かせぬ史料のひとつもなっている。

『神戸又新日報』のマイクロ・フィルム閲覧並びにコピーについては、同紙を唯一所蔵している神戸市大蔵山の神戸市立図書館にお世話になった。記して感謝の意を表したい。